

鉄道は「運動の——いや人間生活そのものの——速度を、1時間あたり数マイルで測られるものから数十マイルで測られるものに変え、鉄道時刻表に象徴される大規模で全国的な、複雑で正確に結合する日常生活という観念をもたらした。それは他のいかなるもの以上に技術進歩の可能性をしめした。なぜならばそれはその他の大半の技術活動の諸形態よりも進歩していたと同時に普遍性をもっていたからでもある。1800年の紡績工場は1840年までには陳腐になった。しかし鉄道は1850年までに完成の域に達し、20世紀のなかばに蒸気が廃止されるまであまり重要な変更が加えられることはなかった。鉄道の組織および方式は他のいかなる産業とも比較にならない規模のものであったし、(電信のような)科学的に基礎づけられた新技術の鉄道における利用は前代未聞であった。鉄道は経済の他の部分よりも数世代先行しているように思われた。まことに『鉄道』こそは、『原子力』が第2次世界大戦後にそうであったように、1840年代には超近代のいわば同義語となった。鉄道の大きさと規模そのものが想像を絶するほどであって、過去のもっとも巨大な公共事業さえたわいないものにしたのである。」(E. J. ポプズボーム [浜林ほか訳]『産業と帝国』未来社、1984年、132頁)。